

博士論文審査結果報告書

学籍番号 1629022002

氏名 池内 里美

論文審査員

主査(職名) 塚崎 恵子 (教授)



副査(職名) 表 志津子 (教授)



副査(職名) 多崎 恵子 (教授)



論文題名 Work-related experiences of people living with young-onset dementia in Japan

(若年性認知症を持ちながら就労している日本人の経験)

論文審査結果

【論文内容の要旨】

本研究の目的は、若年性認知症を持ちながら就労している日本人の経験を明らかにすることである。研究デザインは、記述的現象学に基づく質的記述的研究である。若年性認知症の当事者として講演活動を行っている人に研究協力を依頼し、その後はスノーボールサンプリングで参加者を募集した。就労中または退職して一年未満にある若年性認知症の方に、認知症の発症や就労継続のための工夫や困難についてインタビューを行った。音声録音されたインタビュー内容から逐語録を作成し、Colaizzi'sの現象学的分析方法のプロセス7段階に沿って分析した。分析結果を研究参加者に提示し、結果が研究参加者の経験と相違ないことを確認した。本研究は、金沢大学医学倫理審査委員会の承認(承認番号; 868-1)を得て実施した。

参加者 11名のうち9名はアルツハイマー病、1名はレビー小体であり、診断直後、2名は解雇されたが、その後別の職場で別の仕事についていた。逐語録から就労経験に関する重要発言を抽出し、それらを意味づけして10のクラスターを抽出した。さらに、クラスター間の本質的な意味内容を検討し、最終的に「就労継続の危機」「支援を求める」「働くために挑戦する」「就労と社会参加の再開により目的意識を再確認する」の4つのカテゴリーを分類した。参加者は、若年性認知症への理解がある職場や保健医療福祉専門職の支援によって、就労継続や復職、退職後の社会参加に移行することができていた。しかし、過剰な支援により無力感を感じていたため、若年性認知症の人のニーズを理解し、力を与えるサポートを行う必要があると示唆された。

【審査結果の要旨】

若年性認知症は働き盛りの年代に発症し、職業上の困難や生活全般に大きな影響をもたらす。本研究は本邦で初めて当事者の経験を明らかにしており、疾患の希少性から対応に苦慮している事業所において、当事者の視点に立って支援を検討するための貴重な資料となった。

質疑応答では、データ収集における当事者への配慮、分析方法の詳細、カテゴリーの意味や構造、クラスターの意味、結果の活用の方角性等について質疑があり、適切に回答した。

以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士(保健学)の学位を授与するに値すると評価する。